

## ピッティ宮のペルジーノ作《哀悼》におけるフランドル絵画の影響 — ディルク・バウツ作《フォスカリ家の祭壇画》との関係を中心に —

江藤 匠（女子美術大学 非常勤講師）

現在フィレンツェのピッティ宮内に、1495年の年記とペルジーノの署名の入った《キリストの哀悼》が展示されている。この大型の板絵は、ヴァザーリの「ペルジーノ伝」にも記されているように、本来は同市内のサンタ・キアラ尼僧院のために制作された祭壇画である。主題の《哀悼》は、13世紀のフランチェスコの画家以来のペルーシアのパセティックな《哀悼》の絵画伝統に則っているが、その風景を組み合わせたスタティックな構図は北方に起源が求められる。すでにヴェネチアのロビラント家の所持していたペルジーノの《哀悼》は、ヨース・ファン・クレーフェのケルンにあった16世紀初頭の《哀悼》との関係が指摘されている。ペルジーノは、油彩技法の習得などヴェロッキオ工房との関係が深かったため、フランドル絵画の影響は蓋然性をもっている。そこで本発表では、ピッティ宮の《哀悼》のプロトタイプとして、ヴェネチアのフォスカリ家が所持していた1455年頃のディルク・バウツの《磔刑》を中心とする三連祭壇画を想定しようというのである。

まず、ペルジーノの《哀悼》とバウツの《磔刑》の類似性として、背景の風景が挙げられる。すなわち、どちらにも山の斜面に円環状に連なっていく城壁や、蛇行する川に架かる城門の橋など共通点が見られる。また、バウツの祭壇画の右翼には《埋葬》の場面があるが、横向きに着座したキリストやそれを支える髭面のニコデモ、キリストの腕を取るマリアなど人物の姿勢も類似している。マリアの頬を伝わる涙の描写など、当時のフィレンツェで人気のあったフランドル絵画のヴェリズモの影響なしには考えられない。しかも、これらの人物は相互の関係が緩く、劇的な要素を廃して静的な無時間性を醸し出している。そのため画面には、受難の物語性は維持されながらも、キリストの遺骸(Corpus Christi)に礼拝像としての威容が付与される。そこに、物語画と祈念画の融合を試みた北方的な「イマゴ・ピエタティス」の理念を継承し、発展させようとする意図を見ることが出来る。

1480年代のフィレンツェでは、ショーンガウアーなどのドイツの版画が流布し始めていたので、これら北方版画の《哀悼》との関係にも配慮しなければならない。しかし版画との関係からは、城壁が円環状に連なった風景の類似性までは説明できない。しかも造形的な引用ばかりでなく、特定の人物を際立たせる叙述様式を適用し礼拝像としての機能を保持している点でも、版画よりも祈念画からの影響が強いといえる。従って、発表者はペルジーノ作《哀悼》の制作に、ヴェネチアにあったバウツの《フォスカリ家の祭壇画》が、何らかの媒介によって関与していたと推定する。もしもこの推論が妥当性をもつならば、従来あまり注目されてこなかった、ラファエロの師ペルジーノとフランドル絵画の関係が論証でき、16世紀の古典様式の確立に新たな視点が開けるのではないかと思う。